

# ジョイスのいたましい短篇

——『ダブリン市民』の「いたましい事故」について——

桑 原 俊 明

## は し が き

なぜ、いま、「いたましい事故」について考える必要があるのか。昨今の海外のジョイス研究は『ユリシーズ』から『フィネガンズ・ウェイク』に移りつつあるという。ジョイス晩年の難解をきわめる、夢世界の物語が盛んに論じられつつある時勢に、なぜ、初期短篇集『ダブリン市民』の一篇「いたましい事故」をとりあげる必要があるのか。

「孤独」をテーマとするこの短篇は、『ダブリン市民』のなかでも、大学英語テキストに収録される割合の高い作品である。それだけ、大学生にとって、ジョイス入門作品として非常にポピュラーな教材となっている。

この作品の主人公ミスタ・ジェイムズ・ダフィーの悲劇は救いようのない暗さを帯びている。その暗さは、当今の大学生にはほとんど無縁かもしれない。作品の結末でダフィーが意識する絶対的孤独感に、大学生の読者はどれだけ共感を覚えるだろうか。

たまたま、筆者は、今年（平成5年）の前期講座で「いたましい事故」を受講生に紹介する機会を得た。受講生に提出させたレポートの大半は、教室内で提示した既存の批評内容の域を超えていなかった。しかし、受講生のレポートは、筆者に改めて「いたましい事故」について考えてみる機縁を与えてくれた。

なぜ、ダフィーはミセス・シニコウとの絆を断ち切って、自己保身に走るのか。彼の潔癖な性意識は、カトリック社会の目に見えない規制が影響を与えたものなのか。彼の観念的自我意識は魂の救いをもたらさうだろうか。「おのれを与えることあたわず」（D 111）と彼の耳元に

囁きかけた、彼の内なる声の正体は、実は、悪魔だったのだろうか。

いま、「いたましい事故」を論じることが、これらの疑問を検討することにはかならない。この論考が『ユリシーズ』読解の一助、ひいては『フィネガンズ・ウェイク』分析の糸口とならんことを期待し、祈りつつ、検討を始めたい。

## I. 孤独の自覚

ダフィーの悲劇の原点はミセス・エミリー・シニコウとの出会いにある。では、彼にとって悲劇とは何を意味するのか。それは、癒しがたい孤独感の自覚であろう。ミセス・シニコウの死が、彼にとって、天涯孤独を自覚させる決定的要因となった。

かつてダフィーの魂の孤独を、一時的にせよ、癒してくれた心の友は、もう存在しない。もうこの世に彼女は存在しないという事実を突きつけられて、彼はたじろぐ。自分にできうことが何かあったのではないか、自分は彼女を救うことができたのではなかっただろうか、と彼は自問する。いや、何もできなかったはずだ、別れるのが最善の道だったのだ、それ以外に何ができただろう、一緒に暮らすわけにはいかなかっただろうし、何も人から咎められる筋合いはないのだ、とみずから言い聞かせ、みずからを納得させようとする。

このように、必死の自己弁明を彼は展開する。しかし、彼女の死は自分が彼女を見捨てたからではないのか、という自責の念はけっして消えない。彼女を死にいたらしめたのは自分ではないかと思えば思うほど、彼の悔悟の念は深くなる。

そして、おのれの理性が冷静な判断をくれない状況に立ち至ったことを、彼は知る。彼は「おのれの徳性がこなごなに碎ける」(D 117)を感じる。彼の理性はもはや用をなさない。理性は、こなごなに碎けてしまった徳性ととも、その機能を失う。

「なぜ彼女に人生を与えなかったのか？ なぜ彼女に死の宣告をくださったのか？」(D 117)と自己に問いかけてみたところで、理性も徳性も失ってしまった彼に、まともな答えを導く能力があるはずもない。ただ、彼は、孤独の寒さが身に沁みるのを感じずるのみである。

ダフィーの孤独の自覚は、ミセス・シニコウの孤独を理解する最初にして最後の機会となった。彼女との交際中、そして交際破綻後も、彼は、彼女がほんとうは孤独で、心のふれあいを欲していたことを気づかなかった。もっと正確に言えば、気づかないふりをしていた。と同時に、気づくのがこわかったのである。

なぜなら、彼女の孤独を理解することは、おのれの孤独を自覚することにほかならないからである。相手の孤独を深く認識するには、みずからが孤独の意味を知っていなければならない。自分の孤独を認めたくないがゆえに、相手の孤独に気づくのがこわかったのだ。

相手の心は、合わせ鏡となって、自己の心を映し出す。相手の孤独の心は、合わせ鏡となって、おのれの孤独感を映し出す。そのつらい事実を、ダフィーは認めるわけにはいかなかった。認めるだけの勇気がダフィーにはなかった。

しかし、ミセス・シニコウ亡きいま、彼は、彼女が生前いかに孤独であったかを、残酷にも思い知らされる。それと同時に、自己の孤独を認めようとしていなかった彼は、彼女の死によって、いやおうなく、おのれの孤独を<sup>きと</sup>覚らせられる。

彼女は、死して、彼に孤独とはなんたるかを教え、示した。彼女の死を犠牲にして、彼は自分自身の孤独だけでなく、彼女自身の生前の孤独をも自覚した。彼女の死の代償に報いることができないがゆえに、彼の孤独の思いは、いやがうえにも一層強くなる。

ダフィーとミセス・シニコウの結びつきに「孤独」という因があったとするなら、彼女の「死」が縁となって、彼の孤独の「自覚」という結果が生じたと考えられる。あるいは、ふたりの「孤独」という因が、「離別」という縁によって、彼女の「死」という結果を招いたとも考えられる。いずれにしろ、悲劇の素因は、ふたりの孤独な心にあったことに変わりはない。

ふたりの心のなかに孤独を癒したいという願いがもともと存在していたがゆえに、ふたりの出会いは始まったのであり、そうでなかったなら、ロタンダ演奏会場でミセス・シニコウが、隣席のダフィーに会話への誘いととれるような言葉を発することはなかっただろう。

夫の「快樂の展示室」(D 110)からつまはじきにされた女と、「他人と心で交わることなく、自分だけの精神生活を送っていた」(D 109)男の出会いと別れ。そして、女の死と男の孤独。ふたりの運命は、悲劇を生起させうる因と縁に満ちていた。

夫から十分な愛を注がれていない妻は、愛の不足を心のなかで嘆いていた。一方、他者との心と心の交流を避けて、ひとりよがりの精神生活を送っていた中年独身男性は観念的世界に埋没していた。

ダブリンとオランダを往復する商船の船長である夫は、しょっちゅう家を留守にしていた。家庭内で愛を十分に与えられていなかったであろう妻は、家庭外での愛の補給を期待していたにちがいない。愛の補給を期待する心は、けっして幸福を招く因とはならない。

ふたりの思考と思考がからみあうにつれて、ふたりは、すこしずつ、お互いの心の空隙を埋め合わせることができた。ミスタ・ダフィーは、自分の理論を話して聞かせることによって、ミセス・シニコウは、自分の経験を話すことによって、彼らふたりはお互いの心を浄化させつつあった。

彼女は、無心に、彼の理論に耳を傾け、それを受け容れた。彼女は母性的愛情から彼の「告解聴聞者」(D 110)となった。彼女は彼のすべてを受けとめ、包みこみ、許せる境地に近づき

つつあった。彼女は、彼が心の痛みをさらけ出してくれるなら、それに膏藥を塗り、それを癒してあげようと思っていたはずだ。そうすることによって、彼女は、彼からなんらかの愛の返礼を受けることができたかもしれない。

しかし、ダフィーからの返礼は、許しがたい仕打ちとなって現れた。彼は、心の痛みをさらけ出すことなく、離別という、彼女にとってみれば、耐えがたい仕打ちを返してよこした。たしかに、離別のそもそもの原因は、彼女の激情から発した行為にあった。だが、彼の手をとり、頬におしあてる行為は、単なる空聞のわびしさから出た、三次元的欲望の現れではなかったはずだ。

理性をほとんど失い、感情におしながされた行為とはいえ、その根底にあったものは、彼女自身の心の救済を求める気持ちではなかっただろうか。愛を求めるがゆえに出た、激情の高まりによるふるまいであるなら、その心を誰が責められよう。ミセス・シニコウはなぜ自分がそのようなふるまいに出たのか、その理由がわかっていないのだから。

彼女を責めることは誰にもできない。しかし、ダフィーはそのふるまいにうろたえ、結果的に、彼女を拒絶した。彼にとって、彼女のふるまいこそが許しがたい行為に思えた。彼がくだした判断は理性的判断にとどまっていた。不幸にも、彼は心のレベルでその問題を考えようとしなかった。

## II. 慢 心

ダフィーのとった絶縁という行為は、相手を心から理解することの拒否を意味していた。自分だけの精神生活のなかに他者が深入りしてくることを拒んだのである。精神生活を乱さない程度に他者が接近してくることは許せたが、精神生活そのものをくつがえすような他者の介入は許せなかったのだろう。

彼が求めていたのは彼女の母性であったはずなのに、なぜ、彼は彼女の母性的愛情を全面的に受容することができなかったのだろうか。

彼の知的な生活と彼女の母性的な情感の潤いを、お互いにそれぞれ分かち合い、与え合うことはできたが、三次元的でない真実の愛の共有という段階にきたとき、彼は彼女に静かに離別を告げた。

「彼の心を高揚させ、性格の粗い<sup>かど</sup>角をまるめ」(D 111) てくれた彼女との結びつきを最終的に忌避させた根本原因のひとつは、結局、彼の思いあがりではなかっただろうか。ダフィーの思いあがりをとれる内容の一文は冒頭に置かれている。

ミスタ・ジェイムズ・ダフィーがチャペリゾッドに住むのは、みずからも市民のひとりであるダブリンをできるだけ離れて暮らしたいと思うからであり、ほかの郊外はどれも下劣で、当世ふうで、きざだと思うからである。(D 107)

ここにみられる彼の意識は、ひとつには、中産階級意識から生まれる優越感であろう。自分の暮らすチャペリゾッドだけが特殊な場所であるかのような意識が感じられる。その意識は非常に独善的な思いこみにすぎないだろう<sup>2)</sup>。

ダブリン市民でありながら、ダブリン市民であることの事実を認めたくないこだわり。また、チャペリゾッド以外のほかのダブリン郊外を見くだす<sup>おご</sup>驕った心。このこだわりと驕った心は、自分はほかの者とは違うという、一種の優越意識の生成要因となる。

他人と違う人間であるというような思いこみを彼に抱かせているのは、彼の知性であろう。自分には知性があるという思いが、他者と自己とをわけ隔てる要因となっているようだ。

ここで、わたしたちは、ダフィーが銀行の仕事を終えてから夕食をとる料理店は、「ダブリン社交界のきざな青二才ども」(D 109) とつきあう心配のない店であったことを思い出す必要がある。金はあるが、ろくな教養はない、と彼がみなしていたであろう若い紳士たちを、彼は心のなかで嘲笑しているようだ。

他者とのつきあいが苦手だと思っている彼の道楽は、町はずれをひとり歩いてみたり、下宿

の女主人のピアノを弾いてみたり、オペラやコンサートに出かけることだったのである。仲間も友人もない、そして、教会と信仰に無縁の彼がコンサート会場で出会った女性が、皮肉にも、彼にとって魂修行の試金石となった。

つまり、他者との心の交流がなしうるか、という修行課題を彼は与えられたのである。この修行課題は、彼の魂の孤独な傾向性自体がひきよせたものであり、彼がこの世で克服しなければならぬ魂の宿題であった。

ダフィーをミセス・シニコウへひきよせたのは、彼のもつ魂の孤独な傾向性のほかに、彼女のもつ知性の雰囲気であった。もっとも、残念ながら、彼女と共有しようと望んでいた「知的な生活」(D 110)は幻想にすぎなかったことを、彼はあとで知るのだが。初めて会話を交わした日に、彼は「この婦人を永遠に記憶にとどめようとした」(D 109)。彼を魅了したのは、「いまでも知性をとどめている」(D 109)彼女の容貌であった。

初めて出会った日に、知性を感じさせる彼女の存在を、現在のみならず、未来においても、彼は魂の記憶に刻印しようとしたのである。知性の共有が、まず第一に、彼の望んでいた交際であっただろう。だからこそ、彼は、アイルランドにおける社会主義運動の是非を、経験談を交えて、彼女を相手に説くのである。その体験談のなかで、彼はこう述懐している。

しばらくアイルランド社会主義同盟の会合に出ていることがあるんです、と彼は話した。薄暗い石油ランプに照らされた屋根裏部屋で、二十人ほどのきまじめな労働者たちにかこまれていると、なんだか偉くなったような気がした。(中略)これから何世紀かのあいだ、ダブリンに社会革命が起こることはまずありませんまいよ、と彼は彼女に言った。(D 110-11)

自分は「きまじめな労働者たち」と違う、という一種のインテリ意識が、結局のところ、労働者たちの会合から足が遠のく原因になったのだろう。そして、批評家気取りの断定口調で、彼はダブリンに社会主義革命の起こる可能性を否

定した。その否定には、社会主義運動に対する失望と落胆の念がこめられていた。

ダフィーのなかに驕り高ぶる魔の心が巣くっていた。社会生活において、銀行の出納係を長年勤め、個人生活において、モーツァルトの音楽を好み、ハウプトマンの『ミヒャエル・クラメル』の翻訳に取り組んでいる。そのような身分と教養のある彼は、自分の存在に誇りをもっていた。彼の自尊心は、ひとり暮らしによって、その秩序を保っていた。自尊心は、傷つくことなく、彼の自己保身の道具となっていた。

彼が嫌悪するのは「肉体や精神の無秩序を示す一切のもの」(D 108)であった。ミセス・シニコウとのつきあいは、したがって、肉体や精神の無秩序を示すような状態に陥ることがあってはけっしてならなかった。

彼女との知的な生活に「情感の潤い<sup>うるお</sup>があたえられ」(D 111)つつあったあるとき、彼は彼自身のものと思われる声を聞く。その声に耳を傾けると、彼は自分の姿に天使の姿を重ね合わせる。「彼女の目で見れば、ぼくは天使みたいに大きく見えるだろうな、と彼は思った」(D 111)。

自分を天使だと思った瞬間が運命の転落の始まりだった。いよいよ、自分という全存在を彼女の前に示すときが到来したとき、「おのれ自身をあたえるわけにはいかない。われわれは自分自身のものだ」(D 111)という悪魔の囁きが聞こえてくる。

驕る心が悪魔の囁きの誘因となった。驕り高ぶる心はほんとうの自分の姿を見えなくさせてしまう。誤った優越感と自尊心が悲劇を誘発する因子となったのである。

謙虚な、へりくだる心が彼を悲劇から救ったかもしれないのに、悪魔の声が聞こえてからしばらくたったある夜、ミセス・シニコウが異常な感情の高ぶりを見せたとき、彼は、肉体と精神の無秩序を察知し、やはり魂の孤独はいやしがたいのだ、自分を他人に与えるわけにはいかない、自分はいまの自分のままでいいのだ、と内なる魔にそそのかされて、彼女との離別を決意するのである。

わたしたちは、彼の「自己欺瞞的優越感」<sup>3)</sup>が悲劇のひとつの大きな原因であったと言わざるをえない。

### III. 疑 心

慢心がダフィーの孤独の自覚という、ある種の悟りをもたらすきっかけとなったとするなら、それは運命の皮肉というべきであろう。慢心ゆえに、ミセス・シニコウと別れ、彼女の死ゆえに、魂の孤独を自覚することになるのであるから。

慢心は自己保身を生み、自己保身は悲劇をもたらした。自分の身を守ろうとする弱き心が、ひとりの女性を死に追いやった。自分が傷つくことを恐れたがゆえに、他者の救済の道を断っただけでなく、みずからの救済の可能性をも閉ざしてしまったのである。

ミセス・シニコウと別れたあと、孤独の意味を知ろうとせずに、以前と同じ平穏な生活に戻った彼に鉄槌がくだったのは、彼女の事故死を報ずる夕刊の記事を読んだときであった。最初、彼は、かつてまがりなりにも知的生活を共有しえた女性が、2年ほど前から飲酒癖に陥っていたことを知り、深い失望を覚える。その失望は彼女に対する侮蔑に変わり、やがてその侮蔑は自分の良心の呵責に転ずる。

良心の呵責は自己の孤独の自覚を強いる。彼は自分を信じることができなくなった。自己保存という殻をけって打ち破られることなく生きてきた彼が、ついにその殻を打ち破られたのである。みじめな自分の姿が暴露されたのを知ったとき、彼は深い内省の瞬間を、ジョイス流に言えば、エピファニーの瞬間を得た。

自分かわいさのために、人に愛を与え、幸福を与え、生を与えることをしなかったがゆえに、みずからの人生を闇の世界へ導いてしまった。自分がかわいいという自己保存の思いは、人に平穏な生活を与えはするが、喜びと幸福感に満ちた人生を与えはしない。

ダフィーの悲劇は、自己不信と人間不信に陥った人間の悲劇であった。自分を信ずること

ができない彼の姿を、わたしたちは、「いたましい事故」に認めることができる。

黄土いろの眉毛のしたから世間をながめる [ダフィー]の目は、埋めあわせをつける気が相手にあればいつでもつきあおうと思っているのに、いつもにがい目にあわされる男だという印象をあたえる。彼は自分の肉体にすこしの距離をおき、自分の行動を疑わしげに横目でにらみながら、生きている。(D 108)

彼の処世術は、自分から積極的に働きかけるのではなく、相手の反応をみてから、やっと行動に移すというやり方であった。事実、ミセス・シニコウとのつきあいにしても、そのきっかけをつくったのは彼女の方であり、彼ではなかった。

人に対してやさしくふるまう前に、人からやさしくしてもらうのを待ち望むのが彼の生き方であった。人からやさしくしてもらったなら、こちらもなんらかの返礼を差し出そう、と彼は考えていたのだ。

彼が恐れていたのは、人から肩透かしをくうのではないかという不安であった。その不安は常に彼につきまといていた。人から裏切られるのではないかという被害妄想的な心配性の傾向があった。だから、人からやさしくされることに慣れていなかった。そのやさしさが裏切りに転じてしまうのではないかと心配していたのである。他人を信じられない気持ちだが、彼の心の奥底に潜在していた。

他者への不信は、他者を正しく見ることを妨げるだけでなく、正しい自己分析をも狂わせてしまう。自分の肉体と精神を正しく、客観的に見ることができないとき、人は不安や疑いの心と同居せざるをえない状況に追いやられる。

結局、つかのまの幸福感をもたらしてくれたミセス・シニコウが肉体と精神の興奮状態を見せたとき、ダフィーは彼女をもはや信じられなかった。なぜなら、彼は自分の肉体からすこしはなれて生きていたからである。「やっぱり裏切られたか」というあきらめの思いで、彼は彼女のふるまいを、冷ややかな、疑わしい目で

見ていたことだろう。

人を信じる心が人と人とを結びつける力であるとするなら、その対極にあるのが、人を信じられない心で、それは人と人とをはなればなれにさせる力となる。前者は天使の心であり、後者の悪魔の心である。

ダフィーの疑いの心は悪魔の心をひきよせた。信じる心に疑いの思いがすこしでも入りこむと、信じる力は消滅したも同然である。悪魔の囁きに耳を傾ける存在となってしまったために、無慈悲にも、彼はミセス・シニコウに交際の断絶を言いわたす。信じる力が、人と人とを結びつける力が、消えたからである。

「あらゆる絆は、悲しみにいたる絆なのです」(D 112)と彼は言った。人と人との絆を断ち切ろうとする力は、愛の対極にある、排斥しあう力である。ミスタ・ダフィーとミセス・シニコウを結びつけていた、かりそめの愛の力は、もろくも崩れさり、排斥しあう力に一変してしまった。あらゆる絆は「幸福にいたる絆」でなければならなかったのに。

疑いの心、不信の心、猜疑の心、すべては悪魔のそそのかしに抗しきれなかった人間の心である。ダフィーの人生の敗北は、みずからの疑心が招いた結果であったとしても、誰がダフィーを責められよう。誰もが、おのれかわいさの弱き心を抱えているのだから。

「彼には仲間も友人もいなかった。教会にも、信仰にも無縁だった」(D 109)という一節を、わたしたちは、表面的に理解するわけにはいかない。これは、アイロニーの仮面であって、本当は仲間や友人がほしい、教会や信仰が必要だ、という彼の潜在願望の裏返しであると解釈することが可能だろう。

ダフィーが望んでいるのは、ミセス・シニコウの望んでいるのと同じ、愛の補給である。愛を与えることよりも、他者から愛を与えられるのを待ち望んでいるのである。お互いが愛を与えられることを望んでいるかぎり、ふたりのあいだに、魂と魂の真のむつみ合いが生まれることはけっしてない。

「愛とは、あらゆる贈り物のなかでただひとつ

のかけがえのないもので、与えれば与えるほどその人のものになる」<sup>4)</sup> ということをふたりが知っていたなら、いたましい結末にいたらなかったであろう。他者の存在がすでに愛であるということを彼らは知らなかった。

いたましい結末はふたりの魂の墮落を意味する。この「いたましい事故」という短篇の題名は、ふたりの救いがたい、たましい(魂)の悲しい末路を暗示しているかのようである。

ここで、わたしたちは、ミセス・シニコウの飲酒癖について考えておく必要がある。事故死を報ずる新聞記事によると、彼女は2年ほど前から酒に溺れるようになり、夜中に酒を買いに行く癖があった。

ダフィーとの別れから4年。43歳のミセス・シニコウは、心の傷を癒すためなのか、魂の痛みを意図的に麻痺させようとしてなのか、いずれかなのかわからないが、かなり酒にふけていた。愛を与えられなかったことを不満に思いながら、愚痴の心を酒にまぎらわせていた。

彼女の飲酒癖は、酒を飲みたいという貪欲と、酒を飲んで愚痴や不平不満を晴らそうという愚かな心が引き起こした悪癖であった。線路を横断しようとして、列車の機関車にはねられて、「ショックと急激な心臓麻痺」(D 114)で死んだとき、彼女は貪りの心と満たされぬ思いを抱いたままであった。

彼女の救われざる魂は闇のなかであって、ゆくさきがわからない。ゆくさきがわからず、地上をさまよう彼女の亡霊を、ダフィーはかつての逢瀬の場所で、霊的に感知する。

四年前に二人で歩いたわびしい小路を歩きまわった。闇のなかにいると、彼女がよりそっているように思われた。時おり、彼女の声が彼の耳にふれ、彼女の手が彼の手にもふれるような気がした。(D 117)

死亡記事を読んだ直後、彼はアルコール依存症のような彼女の墮落生活を思い浮かべ、亡くなった彼女を誹謗する。

彼女はわが身をおとしめただけではない。彼もおとし

めたのだ。彼女の薄よごれた悪徳の場所が見えた。卑しい悪臭を放つ場所が。わが魂の友か！（中略）まったく、なんという結末だ！ はっきりしているのは、彼女が生存にふさわしくない人間だったこと、堅固な目的をもたず、容易に悪習の餌食となったこと、文明に押しひしがれた犠牲者のひとりだったということだ。それにしても、これほどおちぶれようとは！（D 115）

このように激しく非難する心は、彼女とのいろいろな思い出がめぐりめぐり、よみがえってくるにつれて、薄れる。しかし、そのとき、彼は「彼女の手が彼の手にふれたような気がした」（D 116）。彼は慄然とする。

しだいに、彼女に向けられていた非難の矛先は自分自身に向けられるようになってくる。彼女に対する人格否定は彼自身の自己否定へと変わってくる。自己肯定と自己正当化の心の砦はこわれつつあり、自己卑下の思いがどうしてもなく増してくる。

「自分が人生の饗宴からしめだされていた」（D 117）のを深く深く感じないわけにはいかなかった。彼女とのつきあいは現実のことだったのか、彼女の死はほんとうなのか、現実世界と記憶が告げる世界とのはざまにあって、彼は生のたしかな立脚点を見失う。彼の探究する心は物質世界の存在に向けられる。

この世に残っている自分の生とは何か。この世を去った彼女はどににいるのか。彼女の落ちぶれた生を責めるのではなく、肉体を脱ぎ捨てた彼女のあの世での「生命」にいつくしみの心に向け始め、深い自己内省の瞬間が訪れたとき、彼女の亡霊は彼につきまとうことをやめる。

闇のなかでも、彼女がよりそっているようには思えなかったし、彼女の声が耳にふれるのも感じなかった。彼はしばらく耳をすまして待った。何も聞こえなかった。夜はひっそりとして音ひとつなかった。彼はふたたび耳をすました。ひっそりとして音ひとつなかった。彼はおのれの孤独を感じた。（D 117）

この瞬間に、彼は平静心を取りもどし、静かにおのれの孤独を悟得する。ここに、わたした

ちは、将来の彼の魂の救いと彼女の靈魂の浄化という、希望の曙光を認めることができるのではなかろうか。

孤独の自覚は愛の悟りの始まりであるというエピファニー的真理を、ダフィーのいたましい魂の結末から感得することによって、わたしたちはジョイスのこのいたましい短篇を希望光明の書へと転生させることができるであろう。

## む す び

本論で、ニーチェ風恋愛論のアフォリズムに言及する機会がなかったので、ここで言及しておきたい。「男と男のあいだには性的関係があってはならぬゆえ、愛は不可能である。男と女のあいだには性的関係があらねばならぬゆえ、友情は不可能である」（D 112）という文章は、靈的観点が欠如した肉体的自我に基づくアフォリズムであると考えることができる。

男と男の愛、男と女の友情は、肉体中心の思考からの脱却がなければ、永遠に解決できない問題である。人間の本質を肉体に求めるのではなく、人間の本質は靈魂にあるとする靈的観点を導入した分析がなされなければ、真実の愛のあり方を追究することはできない。

ミスタ・ダフィーとミセス・シニコウの愛の挫折の物語は、キリスト教真理にあてはめて考えてみるなら、七つの大罪のうち、高慢と貪欲、暴飲に相当するだろう。「あらゆることにおいて彼は知的高慢を保持している」<sup>5)</sup> とある批評家はみているし、またある批評家は「ミスタ・ダフィーの大罪は高慢であり、フロイト流にいうと、自我である」<sup>6)</sup> と解釈している。

このように、ダフィーの知的高慢の罪について、筆者だけではなく、ほかの批評家も認めている。しかし、ミセス・シニコウに貪欲と暴飲の罪を認める筆者の見方は、ややきびしすぎる解釈かもしれない。むしろ、愛の欠如を嘆き、不平不満を抱く罪と考える方が、より正しい見方かもしれない。

ダフィーの高慢の罪は仏教で説く六大煩悩のひとつに当たると考えることもできる。また、筆

者が検討を加えたところの彼の疑いの心も六大煩悩のひとつである。ミセス・シニコウの「貪」と「痴」もそのなかに入る。

『ダブリン市民』の各短篇に登場する人間は、ミスタ・ダフィーとミセス・シニコウを含めて、なんらかの苦しみを背負って生きている。伝統的なカトリック社会が生む閉塞感が、人々の自由を求める心と行ないの阻害要因になっているところがある。

それは、ジョイス自身がじかに肌で感じた閉塞感であっただろう。だから、『ダブリン市民』の麻痺に陥った人々と同じ運命をたどることを拒絶して、彼は自由を求めてヨーロッパに旅立った。

しかし、その自由とは何を意味するのであろうか。祖国、宗教、政治からの自由であったとしても、その自由は真の意味の自由と言えるであろうか。三次元的な現実世界で生きていくうえでの自由にちがいないが、人間の心のほんとうの自由とはもっと高次元的なものかもしれない。

ミスタ・ダフィーは自由な自己の世界を求めたがゆえに、ミセス・シニコウと別れ、孤独の平穏な生活を選んだのであろう。しかし、その選択は苦しみをもたらした。孤独のほんとうの意味を知ることにはつらいことかもしれない。愛を与えることを知らない人々の住む孤独世界は、愛を与え合う人々の住む調和世界の対極にあるものだろう。

ダフィーは「慢」と「疑」がもとで孤独世界をかいまみることができた。ならば、孤独世界参入の経験を、調和世界へいたるための一里塚とすることができるはずだ。なぜなら、七つの大罪、そして六大煩悩は、ダフィーを、そしてわたしたち人間を、苦界へ迷いこませるための教えではなく、苦界から抜け出させるための教えなのだから。

ここにおいて、罪の自覚は救済への一歩となる。迷いの認識は悟りへの一階段となる。大乘仏教で説くところの煩悩即菩提がここに現出する。

ジョイスが推敲を重ねて、彫琢した文体の織

りなす、愛と孤独の物語は、わたしたちに以上のことを深く考えさせる尊い縁を与えてくれた。

## テキスト

Joyce, James. *Dubliners: Text, Criticism and Notes*. Ed. Robert Scholes and A. Walton Litz. Viking Critical Edition, 1969. New York: Penguin Books, 1976. 邦訳は、一部の修正を除き、高松雄一訳『ダブリン市民』（福武文庫、1987年）に依拠しています。

## 註

- 1) 母メアリが44歳で他界した2年後の1905年に、「いたましい事故」の第一稿を書き上げたという伝記事実から、ジョイスはダフィーの母性憧憬の念にみずからの思いを仮託していたであろうことは容易に推察できる。
- 2) ダフィーがチャペリゾッドを特別な場所とみなしている背景に、彼のブルジョワ的意識のほかに、中世の恋愛物語『トリスタンとイゾルデ』にまつわる伝説が隠されている。伝説によると、チャペリゾッドは、愛ゆえに死するヒロイン、イゾルデの生誕地で、トリスタンとイゾルデの秘密の愛が成就した場所である。Chapel-izod=Chapel Isod=*Chapel d'Iseult*で、すなわち、チャペリゾッドはイゾルデのチャペルを意味する。  
また、1877年頃ジョイスの父ジョン・ジョイスは、チャペリゾッドにあった知人の蒸留酒製造会社に資金を投入したが、知人にだまされて、投資金は戻ってこなかったという。  
(Richard Ellmann, *James Joyce*, rev. ed. (Oxford UP, 1982), p. 16.)
- 3) Craig Hansen Werner, *Dubliners: A Pluralistic World* (Boston: Twayne Publishers, 1988), p. 77. 原文は“a self-deluded sense of superiority.” 以下、英語文献からの引用の場合、参考のため原文を付記しておく。
- 4) Phillip F. Herring, “James Joyce and Gift Exchange,” in R.M. Bollettieri Bosinelli, C. Marengo Vaglio and Chr. van Boheemen, eds., *The Language of Joyce: Selected Papers from the 11th International James Joyce Symposium, Venice, 12-18 June 1988* (Philadelphia: John Benjamins Publishing,



- 1992), p. 178 n4. "Love is unique among all the gifts, for the more you give away the more you have."
- 5) C.H. Peake, *James Joyce: The Citizen and the Artist* (Stanford: Stanford UP, 1977), p. 34. "... in all things he preserves his intellectual pride."
- 6) William York Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce* (1959; New York, Octagon Books, 1971), p. 32. "Mr. Duffy's deadly sin is pride or, as Freud puts it, ego."